ジルベール・シモンドンの「アラグマティクス」構想の二側面
―― フランスにおけるサイバネティクス初期受容の一形態 ――

宇佐美　達　朗

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生人間学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　サイバネティクスよりも普遍的な理論を指し示すためにジルベール・シモンドンが（おそらくは，変化や交換を意味するギリシア語 *ἄλλαγμα* から）作り出した造語「アラグマティクス」は多くの場合，シモンドン哲学の一部をなし，その学位論文を支えるものであると考えられている．こうした見方はしかしながら学位論文の準備草稿についてしか正当でないだろう．アラグマティクスという語は学位論文の主論文においては曖昧で漠然としたものでしかなく，副論文には姿を現さないからだ．こうして，アラグマティクス構想は結局のところ放棄されたのではないかと問うことができる．本稿では，アラグマティクス構想の二つの側面つまり存在論的なそれと方法論的なそれを検討することでこの問いに取り組み，それら側面が学位論文において「関係の実在論」や「類比的範例主義」として保存されていると示すことを試みる．

個体化論と技術論で知られる 20 世紀フランスの哲学者ジルベール・シモンドン（1924–1989）は，その学位論文の主論文にして主著である『形態と情報の概念に照らした個体化』[1]（以下『個体化論』）で «allagmatique» なる造語を用いている．変化や交換を意味するギリシア語 «*ἄλλαγμα*» から造語されたと思しきこの語は，まさにその語を冠した草稿[2]で示されるように，当時フランスに導入されつつあったサイバネティクスに，すなわち生体と機械の類比に基づく学際研究に着想を得たものであった．この語は「普遍的サイバネティクス」（ILFI, 531）として構想された理論を指し示すのであり，この点でアメリカの思想に倣って「アラグマティクス」と訳されねばならない．

ところが実際に『個体化論』を繙くなら，その準備草稿を見る限り一箇の理論として訳されるべき «allagmatique» がむしろ圧倒的に形容詞として用いられていることに気がつく（邦訳でも「アラグマティック」と訳されている）．この語が理論を指すものとして用いられるのはそれなりに議論が重ねられてから（したがって幾度も形容詞的に用いられてから）であり，しかもサイバネティクスとの繋がりも伏せられているため，読者は十分な説明もなしに唐突に現れたこの新奇な語の意味を文脈から推察しようと試みることしかできない．学位論文の要所要所で姿を現すこの語は，その準備草稿である「アラグマティクス」が後年になって『個体化論』の補遺に収録されたこともあり，シモンドン哲学の重要な一概念として認知され用語集に登録されてすらいるが[3]，にもかかわらず『個体化論』を読む限り得体の知れない形容詞でしかない．かくして次のように問うことができる．草稿で「普遍的サイバネティクス」として構想されたアラグマティクスは最終的に破棄されたのではないか？　学位論文に見られるその用例は結局のところたんなる構想に終わったアラグマティクスの残渣にすぎないのではないか？

実際，不十分な定義や繰り返される命名など，学位論文での用例を見る限り，アラグマティクスが当初の構想通り一箇の理論として維持されているとは言い難い．すくなくとも学位論文のみでは

十分に理解できるものではなく，その説明に学位論文の準備草稿という二次的で過渡的なテクストが必要となる ―― 用語集の解説などでも専ら上述の草稿が参照されている ―― 点で，かなり問題のある概念と言える．アラグマティクスをシモンドン哲学の基本概念のうちに数え入れるのには躊躇せざるをえない．しかし過大評価とも言える位置づけにはそれなりの根拠がある．導入のされ方が適切ではないにもかかわらず，この語はシモンドン自身の立場が表明されるような箇所で用いられているのである．本稿では，重要であるように見えるこの語を，構想された通り理論を指し示すものではなく，シモンドン哲学の成立過程で残された「しるし」のようなものとして捉える．

議論は次のように進む．まず学位論文における «allagmatique» の用例を検討し，準備草稿で示されたアラグマティクス構想は全面的に破棄されたわけではないが，理論としては断念されたとの見通しを示す（第 1 節）．続いて，この理論が実際いかなるものとして構想されていたかを，学位論文での用例から一旦離れ，「アラグマティクス」草稿に探る（第 2 節）．その読解を通じて示されるのは，普遍的サイバネティクスを目指した構想の二つの側面，すなわちサイバネティクスの学際性に着想を得た方法論的側面と，同じくこの思想に着想を得たと思しき変換の観点から考察される存在論的側面である．ただしこれらはサイバネティクスから切り離されて展開された．まず存在論的側面に関しては「関係の科学」として紹介されていたサイバネティクスと，関係は存在の身分を持つとする「関係の実在論」との根本的な相違が指摘できる（第 3 節）．学位論文の副論文『技術的対象の存在様態について』（以下『技術的対象論』）で『サイバネティクス』を新たな『方法序説』とみなしているように[4]，シモンドンにとってサイバネティクスはその社会論的側面よりも，むしろ方法論的側面において重要であった．この点を踏まえ，シモンドンがみずからの立場として採用する「類比的範例主義」とサイバネティクスの関係をメタバシス（*μετάβασις*）の再評価という観点から考察する（第 4 節）．

1．学位論文での用例

«allagmatique» という語は基本的に『個体化論』にのみ見出される[5]．以下に示すように，この語はシモンドンの学位論文の主論文において都合 15 箇所で用いられる．

1） l’opération ―（48［51 頁］）
2） en relation ―（49［52 頁］）
3） cette relation ―（ibid.）
4） une ― temporelle（49［53 頁］）
5） une opération ―（50［55 頁］）
6） une relation ―（61［77 頁］）
7） cet état de relation ―（ibid.）
8） la relation ―（62［79 頁］）
9） la relation ―（ibid.）
10） le nom d’ ―（82［114 頁］）
11） une épistémologie ―（111［167 頁］）
12） elle［＝relation］est ―（127［196 頁］）
13） activité de présence mutuelle, ―（227［375 頁］）
14） Cette théorie peut se nommer ―（234［389 頁］）
15） l’on pourrait nommer ―（318［544 頁］）

いずれの用例でも，«allagmatique» という造語の由来は明かされず，準備草稿では明示されていたサイバネティクスとの繋がりも示されていない．学位論文においてこの語はその意味を文脈から推定するほかない単語でしかない．そしてこの語が何らかの理論を指すものであることは ―― もちろん用例 10 では或る種の方法論的態度と結び付けられているのだが ―― 用例 14 になって初めて明かされるのであり，それまでこの語は得体の知れない形容詞でしかない．

新語の導入にあたって当然払われるべき配慮が奇妙にも欠如していることは，この語の分布の偏りからも説明される．『個体化論』は「物理的個体化」と「生物の個体化」の二部構成をとるが，この語の用例が見出される全 15 箇所のうち実に 12 箇所（用例 1 から 12）が第一部に集中し，第

二部に 2 箇所（用例 13 と 14），結論に 1 箇所（用例 15），そして全体の構想が示される序論にはまったく見出されないという分布になっている．偏りは分布だけでなく語の用いられ方にも見られる．草稿を見る限り理論を意味するはずのこの語が『個体化論』で名詞的に用いられるのは 4 箇所（用例 4，10，14，15）のみであり，むしろ圧倒的に形容詞として用いられている．以上のような分布の偏り（特に序論での不在）や用法の偏りは，アラグマティクス構想の維持に関して疑念を生じさせる．

学位論文に見られる限りでのこの語の説明についても少し詳しく見ておこう．『個体化論』での «allagmatique» の形容詞的用法からは，この語が二つの要素が関わる場面で用いられているという大雑把な事実しか読み取ることができないが，名詞的用法についてはやや事情が異なる．「同時的なものの共鳴」と対になる「継起的なものの共鳴」の言い換えとして単発的に登場する「時間的アラグマティクス」（用例 4）を除き，名詞的用法は方法や理論を名づける場面に見出される．すなわち「個体化した存在を，全域的なエネルギー的条件と物質的条件とを中間的な大きさのオーダーに統合する個別性の発展として捉えようとする［…］発生論的方法」（用例 10）や，「空間的配列と時間的系列のあいだの交換プロセスを考察する準安定性の理論」（用例 14），そして「状態間の交換と修正についての一般理論」（用例 15）の命名にこの語が用いられる．ほとんど何も説明していない用例 4 は別にして，たしかにこれら用例は，その登場の遅さに目を瞑る限りで，«allagmatique» の定義のようなものを含んでいると言える（特に用例 14 と 15 は，変化や交換を意味するギリシア語 «*ἄλλαγμα*» を思わせるものとなっている）．しかしその一方で，時宜を得ない繰り返される命名，特に結論という大部の学位論文の締め括りでの命名には，この新奇な語は果たして本当に『個体化論』に必要であったのかという問いが提起されうる．本稿はこの問いに対して，以上に見た用例を削除したところで学位論文の議論の骨組みは崩れず，すくなくとも «allagmatique» という語は別の用語で置換可能であると答える．要するに，『個体化論』はこの語なしに成り立ちうるというのが本稿の見通しである．

とはいえ，たんに «allagmatique» という語を『個体化論』から追放したのでは何の解明にもならないだろう．この語が『個体化論』にとって十分な重要性を持ちえないのだとしたら，つまりアラグマティクス構想がそれとして維持されなかったのだとしたら，そのように考えることのできる理由も提示しなければならない．本稿はそれをシモンドン哲学の成立過程に見出すことにしたい．つまり，アラグマティクス構想には当初から二つの側面があり，シモンドン哲学の練り上げとともにその存在論的側面は「関係の実在論」として，方法論的側面は「類比的範例主義」として展開されていった ―― 実際これらはアラグマティクスとは異なり『個体化論』の序論に見出される ―― という見通しである．このことを確かめるには，アラグマティクスに関して混同される傾向にある学位論文とその準備草稿を，つまり前者における用例と後者における構想を区別し，それらの異同を見てゆく必要があるだろう．

2.「アラグマティクス」草稿の読解

本節では，アラグマティクスが説明される際に必ず参照される「アラグマティクス」草稿[6]の議論を辿ってゆく（ただしそれがシモンドンの最終的な見解を示すものではない点に注意しなければならない）．アラグマティクスを普遍的サイバネティクスとして提示するこの草稿は「類比的活動の理論」という小見出しで二分される．その前半では働き（opération）と構造（structure）の両方を含むものとしての活動（acte）が提示され[7]，後半では結晶化と変調（modulation）という物理化学と情報理論から採られた範例によって，この活動の理論がより広い観点から展開される．

2. 1. 理論の基本要素

草稿はアラグマティクスを働きの理論と規定することから始まる．この理論の目標は「そこからあらゆる個別的な働きがより単純な事例として引き出されるようなただ一つの根本的な種類の働き

を規定すること」（ILFI, 529）で達成される．この草稿では引き出されるに至らなかったこの働きは，のちに学位論文で概念化されるトランスダクション（transduction），すなわち「一つの活動［activité］がそれによって或る領域内で，その領域のここかしこで行なわれている構造化に基づいて少しずつ伝播してゆくような，物理的，生物学的，心的，社会的な一つの働き」（ILFI, 32［22頁］）にほかならない．どの時点でトランスダクションという語が得られたのかは定かでないが，着想そのものは漠然としたかたちであれアラグマティクス構想に含まれていた．この点でシモンドンの歩みは着実に進んでいったと言える．

ただし草稿のその後の展開を考えると，働きの理論という規定は混乱を招きかねない．既に触れたように，アラグマティクス構想において働きと構造は等しく重要なものとみなされる．「働きとは構造の存在論的な相補物であり，そして構造は働きの存在論的な相補物である」（ILFI, 529）．では，なぜシモンドンはアラグマティクスを働きの理論としたのか．ここで既存の個別科学との関係が問題になってくる．

> 働きの科学は，構造の科学がそれ固有の領域の限界に内部から気づく場合にのみ到達されうる．アラグマティクスとは，科学的理論の，働きに関する半面である．科学は今日に至るまでその半分しか成し遂げられてはいない．科学は今や働きの理論を作らねばならない．（ILFI, 531）

働きと構造は存在論的水準では相補的とみなされるが，理論的水準では働きは構造を前提とする．働きの科学あるいはアラグマティクスは，構造の科学あるいは個別科学が一定程度発展することでのみ可能となる．普遍的サイバネティクスたらんとするアラグマティクスのプログラムが働きの理論を作ることにあり，その始まりがサイバネティクスによってしるしづけられる（cf. ILFI, 531）とされるのは以上のような考えによる．したがってアラグマティクス構想を捉えるには，シモンドンが働きー構造関係について述べているところを押さえておく必要がある．この関係についてシモンドンが行なう分類は煩瑣とも言える複雑なものであり，最終的に学位論文では採用されなかったように思われるが，アラグマティクス構想の内実を見るためにもその要点を押さえておきたい．

働きは構造を前提とすると上述したが，精確に言えば働きは構造の変換の連鎖のあいだにある．「働きは二つの構造のあいだのメタクシュであるが，ただしあらゆる構造と異なる本性のものである」（ILFI, 531）．ここで働きと互換的に用いられているメタクシュ（*μεταξύ*）とは「あいだにあるもの」や「仲介者」を意味するギリシア語であり，のちほど見る特殊な意味での「関係」を先取りしているように思われる．いずれにせよ，シモンドンはアラグマティクスが規定すべきものとして（a）働きどうしの関係と（b）働きと構造の関係を指摘し，それぞれ（a）働きを横断する（trans-opératoire）関係と（b）変換（conversion）と名づける．こうして次の定式が与えられる．

> 等価性の公準：働きと働き，あるいは働きと構造は，働きを横断する関係あるいは変換の関係をまったく別箇に同じ第三項と維持するとき，等価である．
> 定義：類比は働きを横断する等価性である．
> 定義：変調および復調とは働きと構造の等価性である．すなわち，変調はエネルギーから構造への変容であり，復調は構造からエネルギーへの変容である．この場合，構造は一つの信号である．（ILFI, 531）

この定式に続く働きー構造関係の記述はいっそう複雑となる．そこではエネルギーは働きと構造のあいだのメタクシュ ―― 上述の通りこれも働きとみなされる ―― と規定され，真の構造たる信号の構造つまり形式（forme）と，その形式とエネルギーを関係づける構造とが区別される（これらは基本的に情報理論の文脈で理解される）．とはいえここでは次の点を押さえておけば良いだろう．「働きー類比ー働き」や「エネルギーー変調ー構造」，「構造ー復調ーエネルギー」（さらに言えばエネルギーは「働きーメタクシューー構造」）

など，（a）と（b）は基本的に三項関係となっており，それぞれ（a）類比的活動と（b）変調の活動（変調と復調の両方を含む）と呼ばれている点，そしてあらゆる働きはこれら活動のいずれか（ないしそれらの組み合わせ）の一側面である ―― つまりあらゆる働きに三項関係が見出される ―― と考えられている点である．アラグマティクスという働きの理論には，以上のような働き－構造関係が前提とされているのである．

以上が草稿前半で述べられるアラグマティクス構想の基本要素となる．類比的活動と変調の活動のうち，後半では特に前者の考察が方法論の観点から深められ，さらには個体をどのようなものとして捉えるかという存在論的な議論に至る．本稿がアラグマティクス構想の二側面とみなすのは，そこで示される方法論的な側面と存在論的な側面にほかならない．

2. 2. 類比の方法論的意義

その方法論的意義が考察される類比は一種の範例主義（paradigmatisme）と結びつけられている．シモンドンはプラトン『ソフィスト』での魚釣師－魚とソフィスト－若者との類比に範例主義の実例を見ている．ただし，そのプラトンが用いるとされる論理的な範例主義は，形而上学的な範型論（exemplarisme）と無関係であるとされる点に注意しなければならない（cf. ILFI, 532）．範例主義はソフィストと魚釣師に共通するような存在論的領野ないしモデルを前提とするのではなく，「既知の個別的構造（たとえば『ソフィスト』で魚釣師を定義するのに用いられるそれ）について体験され習得された思考の働きを，それとは別の，探求対象である未知の個別的構造（『ソフィスト』でのソフィストの構造）へと移すことに存する」（ibid.）．魚釣師－魚から引き出された「誘惑の働き」と「捕獲の働き」はソフィスト－若者にも見出されることになるが，両者が同一のものへと還元されるわけではない．それぞれの構造はみずからの構成要素であるいくつかの項（termes）によって互いに区別されるが，働きと構造は本性を異にするとみなされる以上，働きにおける等価性によって構造や項の区別が消えることはない．

こうして構造 A の働き B と構造 C の働き D には比例の関係が見出される．比例の一致（identité de rapports）こそ，この草稿（およびサイバネティクスについてのそれ）のみならず，シモンドン哲学全体において類比に与えられる定式であり，このとき類比は，同一性の関係（rapports d'identité）であるところの類似（ressemblance）から峻別される（cf. ILFI, 533）．同一性の関係が構造における比例（rapports structuraux）からなるのに対して，類比は働きにおける比例（rapports opératoires）からなると定義される（cf. ILFI, 533）．したがって類比に与えられる最も詳細な定式とは「働きにおける比例の一致」である．実際，この定式は働き B と働き D の等価性を捉えるものであり，先に見た等価性の公準における定義と両立する．

類比と類似の峻別の重要性は科学的思考においても確認される．類比が科学的発見に属するのに対して，類似はサーボ機構（servomécanisme）と脳（cerveau）を同一視するような疑似科学的思考に属するとされる（cf. ILFI, 533）．この批判は明らかにサイバネティクス的なメタファーに向けられている．機械と人間のあやふやな同一視をシモンドンは一貫して批判し続けている[8]．たんなるイメージの結びつきでしかないような類似と異なり，「類比の使用は科学とともに始まる」（ILFI, 533）．シモンドンはその実例として，フレネルによる光の波動性についての発見を挙げている．周知の通り，当時の光の波動説では光波は音波と同様に縦波であると考えられてきたが，フレネルはこれを音波と異なり横波であるとした．シモンドンの言い方では，光の伝播と音の伝播に同一性の関係を見出す類似の段階を脱して，音波という個別的構造の構成要素の一つである縦波という項を放棄することで，波動という働きにおける比例の一致を取ったところにフレネルの天才はあったということになる（cf. ILFI, 533）[9]．

2. 3. 存在の働き－構造関係

類比の方法論的意義を確認したのち，シモンドンは個体における働き－構造関係という存在論的な，あるいは「形而上学的な問い」へと議論を進

める（cf. ILFI, 534）．それはいわば，範例主義というアラグマティクスの認識論的な半面が前提としているはずの存在論的な半面に属する問題である．要するに，類比が方法論として有効であるための形而上学的な仮説が問題となっている．

個体の働きー構造関係の一元論的理解について二つの方向性が検討される．（α）構造に立脚する方向性としてのカントやコントの現象主義的な客観主義（構造に基づく実証主義）と，（β）働きに立脚する方向性としてのベルクソンの力動論的な直観主義（かなり限定的に理解されたプラグマティズム）の二つである．これらはいずれも一元論の立場を貫徹することなく，最初に排除した項を再び導入してしまうというのがシモンドンの見立てである（cf. ILFI, 534）．その妥当性の是非は措くとして，ここで重要なのは，シモンドンがやはり働きー構造の相補性を重視している点だ．実際，アラグマティクス的認識論の責務として，存在つまり個体における構造と働きの真の関係を明確にすること，そしてそこから個体についての（α）構造に関わる認識と（β）働きに関わる認識の厳密で有効な連関を組織することが設定される（cf. ILFI, 535）．これら認識は（α）分析的学知と（β）類比的学知とも言い換えられ，対比的に説明される．（α）分析的学知では全体（存在）が部分の総体あるいは要素の組み合わせに還元されることが前提とされるのに対して，（β）類比的学知は全体を，全体論的作動（fonctionnement holistique）であるその働きによって表現し，原初的なものとみなす（cf. ILFI, 535）．シモンドンにとって重要なのは存在（全体）の作動と構造を接合することであり，アラグマティクスは（α）空間的分類論（systématique spatial, topologique）と（β）時間的図式論（schématisme temporelle, chronologique）の両面から，その分割に先立って存在を捉えることを目指すものとして位置づけられる．

個体という存在のアラグマティクス的な把握のために，シモンドンはあらゆる理論の根柢にあるような直観を物理化学と情報理論という二つの領域に求め，結晶化と変調という範例を導入する（cf. ILFI, 536）．特に結晶化はシモンドンの存在理解にとってきわめて重要である．図式論と分類論によって働きと構造へ展開される以前の個体という存在を指すものとして内的緊張や過飽和，両立不可能性といった用語が導入され，そしてこれが働きー構造とアラグマティクス的に等価なものとみなされる．そこには『個体化論』で提示される前個体的存在（l'être préindividuel）の萌芽が認められる．学位論文においてこの概念はまさに結晶化における過飽和溶液のような緊張や両立不可能性として導入される．ただし草稿に見出されるのはあくまでこの概念の萌芽にすぎない．前個体的存在に帰されるべき緊張や過飽和，両立不可能性は，草稿では個体と同一視されている（cf. ILFI, 536）．個体本位の存在理解から個体化本位のそれへの転向は，いまだ不十分なのだ．

以上のように理解された個体には（A）統一された融合的状態あるいは緊張状態と（B）分析的状態あるいは働きと構造が区別される状態の二つの状態が見出され，（A → B）および（B → A）の個体の状態変化（changement d'état）が活動として捉えられる（cf. ILFI, 535）．この状態変化（あるいは移行）の活動こそがそれぞれ結晶化や変調・復調と呼ばれるのである．働きと構造が未分化であった個体は結晶化によってそれらを分化させ，変調および復調によってその働きー構造関係を変化させてゆく（結晶化と変調の区別は学位論文での個体化と個別化（individualisation）の区別に，すなわち個体の発生とその発展の区別に或る程度対応すると考えられる）．変化や交換を意味するギリシア語から造語されたと思しきアラグマティクスは，これら二種の状態変化の理論であるのだ（cf. ILFI, 536）．こうして草稿は，生成の本性についてのアラグマティクス的仮説のもとで取り組むべき課題として「結晶化の活動と変調の活動が物理学的，生物学的，心理学的，社会的なさまざまな系において結び合わされる仕方を明確にすること」を指摘して終わる（cf. ILFI, 536）．

方法論的側面ではなく存在論的側面の展開を示唆するこの課題は当初の構想通りには果たされなかったように思われる．草稿で示された構想と学位論文での実際の用例には，その後の理論的発展によってもたらされた隔たりが，すなわち学位論文に対する草稿の足りなさ（前個体的存在やトラ

ンスダクション概念など）と過剰さ（働きー構造関係の分析のそれなど）が確認される．基本概念の萌芽を含んでいるにもかかわらずアラグマティクス構想が一箇の理論として成立しなかった最大の要因は，おそらくそれが普遍的サイバネティクスとして構想された点にある．重要な着想源の一つであったサイバネティクスは，シモンドン哲学が練り上げられてゆく過程で，つまりトランスダクション概念が獲得され，前個体的存在に基づく個体化本位の存在理解が明確化してゆく過程で，次第にその重要性を減じていったように見える．以下では，シモンドンのサイバネティクス受容について，「アラグマティクス」以外の草稿も参照しつつ見てゆくことにしよう．

3．シモンドンとサイバネティクス

ノーバート・ウィーナーの 1948 年の著作に冠せられたサイバネティクスという語が，哲学にも通じていたこの数学者によって，第二次世界大戦中から進められていた学際研究を指し示すために「舵手」を意味するギリシア語から造語されたことは周知の通りである．もはやその全体を見渡すことすら難しいその広がりはしかしここでの主題ではない．問題となるのは『サイバネティクス』初版，しかもフランスにおける受容である．ライプニッツを守護聖人とするこの思想はフランスの科学者や哲学者たちにどのように受け容れられたのか．このことは，問いの範囲が十分に制限されているにもかかわらず（あるいはそれゆえに），ほとんど知られていない．『サイバネティクス』の仏訳（*Cybernétique : Information et régulation dans le vivant et la machine*, Ronan Le Roux, Robert Vallée & Nicole Vallée-Lévi（trad.）, Paris, Seuil, 2014）の刊行がごく最近であるように，その研究は緒に就いたばかりである．ここではシモンドン研究者グザヴィエ・ギュシェの研究[10]と，上記仏訳者の一人でもあるロナン・ル・ルーの浩瀚な研究[11]とを参照しつつ，フランスにおけるサイバネティクスの初期受容を手短に概観しておきたい．『サイバネティクス』初版が刊行される 1948 年から，シモンドンが学位論文の口頭審査を受ける 1958 年までのおよそ十年間がその範囲となる．

シモンドンが参照しえたサイバネティクス関連の文献は学位論文の主論文と副論文に付された文献目録から窺い知ることができる．そこには『サイバネティクス』初版や既に仏訳が 1952 年に刊行されていた『サイバネティクスと社会』が見られるばかりか，1946 年から 1953 年にかけて開催されたいわゆるメイシー会議の議事録も挙げられている[12]．フランスのサイバネティクス受容を示す文献として，副論文ではフランスのサイバネティクス学者ルイ・クフィニャルの著作や，関連雑誌の特集や論文などが，また主論文と副論文の両方で，ルイ・ド・ブロイのもとで P. T. T.（フランス郵政省）の主任技師ジュリアン・ロブを実際の組織者として 1950 年に開催された研究集会の記録集『サイバネティクス ―― 情報と信号の理論』[13] が挙げられている．フランスの哲学者で初めてサイバネティクスに一書を捧げたのはおそらくレーモン・リュイエル（*La Cybernétique et l'origine de l'information*, Paris, Flammarion, 1954）であるが，シモンドンの関連草稿が 1953 年に書かれたことを考えるなら，ギュシェやル・ルーの見るようにシモンドンがサイバネティクスに早くから取り組んだフランスの哲学者の一人であったことは間違いない[14]．サイバネティクスとの出会いは科学者や技術者を介してであっただろうとはいえ，哲学的な受容としては一定程度シモンドン自身の関心のもとでなされたと考えられる．

ところでギュシェとル・ルーではシモンドンのサイバネティクス受容について評価の力点が微妙に異なる．両者はともに 1953 年の草稿「サイバネティクスと哲学」（Ph, 35-68）と「サイバネティクスのエピステモロジー」（Ph, 177-200）を取り上げるが，ギュシェがフランス哲学会での 1960 年の講演「形態，情報，ポテンシャル」（ILFI, 537-558）に基づきつつ，人間科学の諸分野の統一という観点から心理ー社会的な水準でサイバネティクスと関係する論点を扱うのに対して，ル・ルーはフランスにおけるその受容の特徴の一つに方法論的な側面への着目を見出し，シモンドンにおけるメタバシス再評価のテーマを指摘している．つまり『サイバネティクス』で述べられる

「すでに確立された科学の諸分野のあいだにあるだれからも見捨てられた無人地帯［no-man's land］こそ，これから稔り豊かに発展する見込みのある土地なのだ，という確信」[15]に裏づけられた学際的側面の重要性を認める点では共通しているが，ギュシェがいわば『サイバネティクスと社会』の方向へ議論を展開するのに対し，ル・ルーはあくまで『サイバネティクス』にとどまると言える．この点で本稿の立場はル・ルーに近い．ル・ルーがフランスのサイバネティクス受容史において示した論点，すなわち方法論としてのサイバネティクスの受容を，本稿はシモンドン研究の枠組みにおいて取り上げなおすことにしたい[16]．

とはいえ方法論的側面の考察に移る前に，関係の実在論とアラグマティクスの結びつき，つまり存在論的側面について本稿の見解を提示しておこう．「関係は存在の身分を持つ」―― 随所に見られるこの定式はなにより序論に現れる（cf. ILFI, 29［14 頁］）―― をその公準とするシモンドンの実在論は関係を，いわゆるカテゴリー的な意味で，つまり先立つ二項のあいだに事後的・偶有的に成立するものとして理解するのではなく，実体に代わるべき「存在の一様相」として，「それがその存在を確かなものとする諸項に対して同時的である」ものとして理解する（ILFI, 32［21 頁］）．この「関係」はそれを構成する諸項ないし異なるオーダーを連絡するものであり，交換や変換，移行といった変化を含意する（cf. ILFI, 83［116 頁］）．以上の「関係」理解を踏まえるなら，『個体化論』での «allagmatique» の用例が基本的に関係の実在論の枠組みのうちにあることがわかる．このことは特にその形容詞的用法に端的に示されている．つまりこの語は第 1 節で見たように全 11 箇所中 7 箇所（用例 2，3，6-9，12）で「関係」に用いられていたが，そのとき「関係」はまさにシモンドン的な意味で理解されるべきものとなっている（紙幅の都合上詳しく見ることはできないが，他の用例も同様である）．働き－構造関係やその状態変化から個体を捉えようとするアラグマティクス構想の存在論的側面はこのように関係の実在論のなかでシモンドン的な意味での「関係」として，あるいはこの「関係」を示唆するものとして保存されている．では関係の実在論はサイバネティクスの影響下にあると言うべきなのか．

ギュシェも着目するように[17]，シモンドンが学位論文の両論文で参照を指示している 1950 年の研究集会の記録の序文で，その座長を務めたジュリアン・ロブは，サイバネティクスをフランス語で指し示すなら最もその実態に近いのは関係の科学（Science des relations）であると述べている[18]．これはたしかにシモンドンの関係の実在論との結びつきを有しているかのように見える．だがロブの言い添える説明が示しているのは，ちょうど電気技師が弱電の技術者と強電の技術者（つまり電子工学と電気工学）に分類されるように，関係の科学はエネルギー論と対比されるものとして把握されるということでしかない[19]．そのとき「関係」は地点間の電気通信という意味で理解され，関係の科学は情報というエネルギーよりも微細な何かを扱う理論（つまり情報理論）を指し示す．関係の実在論の「関係」と関係の科学のそれは働きにおいて異なるのであって，両者の短絡はシモンドン的な意味での類似でしかないだろう．

したがって，シモンドンの関係の実在論はアラグマティクス構想の延長線上にあるが，しかしサイバネティクスの直接的な影響下にあるとは言えない．もちろん学位論文にはサイバネティクスへの言及があるが，それは情報理論という個別科学の一分野としての参照にとどまる[20]．アラグマティクス構想の着想源であったサイバネティクスは，関係の実在論を中心としたシモンドン哲学の練り上げとともに，その重要性を相対的に下げていったと考えられる（学位論文でアラグマティクスとサイバネティクスの繋がりが明言されないのもこのことと無関係ではないだろう）．こうしたサイバネティクスの重要性の相対的な下落は，その評価が方法論的側面にあったこと（cf. MEOT, 147 ; Ph, 38, 197）を考えるなら，さほど不思議ではない．むしろバシュラール認識論の継承が指摘されるように[21]，関係の実在論にとってサイバネティクスは，それなしにはありえないものというよりも，重要な参照項の一つにとどまる．

とはいえ，サイバネティクスがシモンドン哲学に及ぼしただろう大小さまざまな影響がまったく

無意味だったわけではない．サイバネティクスが考察を促進・深化させたものとしてメタバシスのテーマが，すなわちル・ルーがフランスのサイバネティクス受容史研究において指摘し，本稿がシモンドン研究の枠組みのなかで取り上げなおす論点がある．それは第2節で見たシモンドン的な意味での類比に基づく範例主義に関わる．

4. メタバシスと類比的範例主義

ル・ルーはフランスのサイバネティクス受容の特徴として方法論的受容を指摘し，これをメタバシスというテーマのもとで扱っている[22]．メタバシスすなわち他の類への移行（*μετάβασις εἰς ἄλλο γένος*）は，アリストテレスによって禁じられて以来，西洋の科学観を規定してきた．アリストテレスによるその禁止は類の重視に，つまりは諸科学の自律性の肯定と統一科学の否定にあり，近代科学の成立とも無縁ではない[23]．大雑把に言って或る分野から別の分野への移行を意味するメタバシスは，学際性あるいは領域横断性に関する認識論的な問題系を形成している．ル・ルーはこのテーマをフランスのサイバネティクス受容に見るわけだが，これはすくなくともシモンドンに関しては ―― 学位論文でそれとして論じられているわけではないものの ―― 妥当な見方と言える．実際，『フランスにおけるサイバネティクスの歴史』の序論の註84で指摘されるように，シモンドンは1953年の「サイバネティクスと哲学」で次のように述べている．

> ［…］この仕事［＝無人地帯の探査としてのサイバネティクス］は共同的なものでしかありえない．そのうえそれは一つの専門分野ではない．というのもおそらく科学の地図上のそうした無人地帯は，既に確立され，周知のものとなり，理論化された領域と同じ水準にはないからだ．多様な専門分野から「無人地帯」の水準へと移行することはおそらく水準を変更するということであり，そしてこの変更は反省的な領域へとアクセスするということである．水平的ではなく垂直的なこのメタバシスには，一つの哲学的な身振りがある．（Ph, 40）

メタバシスのテーマを（脚注であれ）指摘したル・ルーは「エンジンルームの中の百科全書」と題された章でシモンドン哲学の学際性とそれを成り立たせる技術性を考察しているが，その考察はしかし科学技術的（あるいは «polytechnique»）な文脈に終始しており，シモンドンの言う「水平的ではなく垂直的なこのメタバシス」には分析を加えていない[24]．まさにサイバネティクス研究であるがゆえに，ル・ルーの指摘はたんなる指摘にとどまっているように思われる．本節ではこの点を掘り下げて考察する．

上記引用の通り，科学の領域間に広がる「無人地帯」を発見し開拓するサイバネティクスの企てをシモンドンはメタバシスの実践と捉えている．つまりサイバネティクスは複数の個別科学を統合するような統一科学としてではなく，それら科学間の橋渡しをする普遍的な技術知，科学的領域を横断する一種の技術論として評価されている（cf. Ph, 41）．アラグマティクスの個別部門が「物理学－化学的」「心理学－生理学的」「力学－熱力学的」といったように分野どうしの間隔を埋めるようなかたちで提示されている（cf. ILFI, 529）ことからも，ウィーナーが「無人地帯」という表現のもとに提示した理念はシモンドンに小さくない影響を与えたと考えられる．とはいえそれはそのまま継承されたわけではない．たとえば『技術的対象論』では，サイバネティクスは生物と自動制御された技術的対象の同一視によってその学際性を危うくしていると言われる（cf. MEOT, 59）．したがってシモンドンによるメタバシスの方法論的使用にはサイバネティクスとは別の名が，すなわち「アラグマティクス」草稿でも扱われた範例主義，「類比的範例主義」（ILFI, 33［24頁］）の名が与えられるべきであるように思われる[25]．

ところでメタバシスは最初からサイバネティクスと結びついていたわけではない．事実，サイバネティクスへの言及が見られるようになる前の1950年頃のテクスト「さまざまな百科全書と百科全書主義的精神」には「中断や他のものへの移

行［*μετάβασις εἰς ἄλλο*］（「平面つまりオーダーの変更」）のないこの膨張は進歩であり，内在でもある」（Ph, 124）との記述が見られる．ここには注目に値する点が少なくとも二つ含まれている．第一に，平面やオーダーの変更（changement）と言い換えられているように，この時点で既にメタバシスは独自の再定式化によって脱アリストテレス化されている．実際に，1962 年度ポワティエ大学講義「自然科学と人間科学」に見られる用例（cf. Ph, 244）を除いて，メタバシスは «*γένος*» を欠いたかたちで，つまり「他の類への移行」ではなく「他のもの（＝平面やオーダー）への移行」として再定式化されている．そして第二に，メタバシスは旅のメタファーで捉えられている．中断もメタバシスもない膨張（dilatation）であるところの進歩とは，世界を探索しつつも，出発点に戻ってくるがゆえにその限界を踏み越えないような船乗りの旅路として提示される．それは成果をもたらすが，同じ平面やオーダーで，つまり一つの領域内で完結する ―― シモンドンが膨張としての進歩を内在と呼ぶのはこの意味においてであるだろう ―― がゆえにたんなる知識の拡大にとどまる（cf. Ph, 124）．もちろん進歩そのものが蔑視され排除される必要はないが，しかしシモンドンが特に評価する長い回り道（*τὴν μακλὸν ὁδόν*, le long détour）―― この表現は「サイバネティクスのエピステモロジー」にも見られる（cf. Ph, 193-194）―― と区別されねばならない．水平方向のメタバシスと垂直方向のメタバシスの区別，そして後者の評価は，この行き方の区別に対応している．

反省的な領域へのアクセスとしてのメタバシスは平面やオーダー，水準の変更を意味し，「水平的ではなく垂直的」（Ph, 40）である．重要なのは，オーダーの変更による反省的水準へのアクセスが，より上位の階層へと登ってゆくことを意味しない点である．シモンドンの考えるメタバシスの垂直性はひたすら上昇してゆく超越的なものではなく，具体性と抽象性，個別性と一般性を行き来するような運動，つまり「長い回り道」によって表わされる運動を意味する．この道行きは具体性・個別性から始まる．「反省的なものを自発性から切り離す閾はそれゆえまず自発的なものから反省的なものへ進む方向で踏み越えられ，それから反省的なものから自発的なものへ進む方向で踏み越えられる」（Ph, 36）．一つの領域にとどまるのでも，ひたすら上昇してゆくのでもないこうした運動は学位論文にも見出される．「不完全な思考はみずからの領域にとどまる」が，「思考が完全なものとなるなら，完成状態にある個別的活動に普遍的射程［…］を与える他のものへの移行［*μετάβασις εἰς ἄλλο*］が可能となる」のであり，そうしてその個別的活動（acte particulier）は長い回り道を経て確固たるものとなる（MEOT, 249）．

或る領域の範例に別の領域でも機能するような一般性を与えるという ―― 良くも悪くもシモンドン哲学を厳密な意味での科学哲学から隔てる ―― この方法論が，たとえばすべてを物理学的に説明するような還元主義に陥る危険をシモンドンは自覚的していた（cf. ILFI, 313［535 頁］）．こうして「範例の元の領域と適用領域のあいだでの働きや機能における類比が可能でなければならない」（ILFI, 309［528 頁］）という範例の有効性の基準が設定される．メタバシスとは，或る個別的分野の具体的内容が一種の抽象化を経て，別の分野の異なる具体的内容に等価性を見出す運動である（これは「アラグマティクス」草稿で形而上学的範型論から区別された類比的範例主義に対応する）．そのとき抽象化は，シモンドン的な意味での類比を発見することでなければならない．この意味で，範例の普遍性・一般性は働きの一致としての類比に条件づけられている．ただしこの類比そのものは最初の選択にいかなる条件も課してはいない．この選択は当該領域の歴史的状況（たとえば現代物理学の発展）によるものであって恣意的ではないとされるが，しかしそれゆえに選択そのものの原理的な説明は断念されざるをえない．その選択は自発的であって，反省により統御されうるものではない．その選択には個別的な状況で出会われる問題系が関わっている．メタバシスを要請するのは，「否定的なものの現前や乗り越え難い困難，死や不条理の萌芽としてのみ現れる」ような問題系 ―― これはもちろん生存や実存に関わるものばかりではない ―― の実在性である

（Ph, 36–37）．メタバシスのテーマはこうしてアラグマティクスとは異なるテーマに，すなわちまず学位論文で提示され，その後パリ大学講義でさらに展開される「水準の変更（changement de niveaux）による問題の解決としての発明」というテーマに接続される．これはしかし本稿の枠組みを超える主題である[26]．

結　　び

以上のように，アラグマティクス構想は，その方法論的側面についてはメタバシスや類比的範例主義（ひいては問題の解決としての発明）といったテーマにおいて，また存在論的側面については特に関係の実在論において展開され維持された．この意味で，アラグマティクス構想は一箇の理論として断念されつつも，或る程度その目的（根本的働きとしてのトランスダクション，関係としての個体，類比に基づいた範例主義）は達成されたと言える．学位論文での «allagmatique» の用例が基本的には後者の存在論的側面にのみ関わり，「普遍的サイバネティクス」という当初の理念をまったく示唆しないのは，その展開の過程で，構想の着想源であったサイバネティクスが特権性を失っていったからであると考えられる．生体と機械の類比に基づく学際研究の理念は実際，前個体的存在を前提とする存在理解から遠く，またその類比の使用に関しても（すくなくともシモンドンにとって）不徹底であった．したがって，アラグマティクスという語にシモンドン哲学の成立過程を伝える以上の役割を負わせるべきではないだろう．それは解明の終端ではなく発端なのである．

注

1）Gilbert Simondon, *L'Individuation à la lumière des notions de forme et d'information*［2005］, Grenoble, Gérôme Millon, 2013. 以下参照に際しては略号「ILFI」を用いる．邦訳（『個体化の哲学』藤井千佳世監訳，法政大学出版局，2018 年）の該当頁も［ ］で併記するが，必ずしもその訳文や訳語に従うものではない．特に本稿の主題である «allagmatique» については異なる方向性の解釈を提示する．

2）Gilbert Simondon, «Allagmatique»（ILFI, 529–536）．『個体化論』に補遺として収録されたこの準備草稿は邦訳では割愛されているため，参照の際には略号「ILFI」と原著ページのみを示す．

3）Cf. Jean-Yves Chateau, *Le Vocabulaire de Simondon*, Paris, Ellipses, 2008 ; Jean-Hugues Barthélémy, «GROSSAIRE SIMONDON», *Cahiers Simondon*, nº 5, 2013. 後者は入門書 *Simondon*（Paris, Les Belle Lettres, 2014）などにほぼ同じ文言で再録され，*Gilbert Simondon : Being and Technology*（Edinburgh, Edinburgh University Press, 2012）に英訳が収録されている．

4）Gilbert Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques*［1958］, Paris, Aubier, 2012, p. 147. 同様の文言は準備草稿にも見られる．Cf. *Sur la philosophie*, Paris, PUF, 2016, p. 38, 197. なお以下参照に際してはそれぞれ略号「MEOT」と「Ph」を用いる．

5）学位論文に組み込まれなかった草稿を除く．『技術的対象論』の準備草稿では「普遍的知解可能性の範例としての技術的対象」に用例が見られる（cf. Ph, 414, 419–420）．この草稿の記述は，『個体化論』の結論に続くかたちで執筆されていたが最終的に破棄された草稿「個体化の概念がもたらす帰結についての補足的覚書」（ILFI, 331–355）と地続きになっており，実際この草稿にも用例が見られる．

6）この草稿の執筆時期は明らかではないが，内容面からサイバネティクスについて 1953 年に書かれた二つの草稿，「サイバネティクスと哲学」（Ph, 35–68）と「サイバネティクスのエピステモロジー」（Ph, 177–200）と同時期と考えられる．これら二草稿にはウィーナーの『サイバネティクス』の序章に添った記述が見られるのに対して，「アラグマティクス」ではそこから離れた記述がなされている点を考えれば，後者は前二者より後に書かれたと推察される．さらに推測を重ねることが許されるなら，「サイバネティクスと哲学」→「サイバネティクスのエピステモロジー」→「アラグマティクス」という執筆順を想定して，«allagmatique» の初出を「サイバネティクスのエピステモロジー」に求めることができるかもしれない．この草稿ではサイバネティクスよりも普遍的な語として，変換の理論を意味するアラグマティクスが提案されているが，「たとえば一つのテクストを或る言語から別の言語へと翻訳可能な操作［opérations］についてのそれのような研究を含む」（Ph, p. 184）とされるように，いまだサイバネティクス的な趣――この方向性は結局棄却されるのだが（cf. Ph, 197）―― が強いように思われる．

7）シモンドンは構造と働きを厳密に定義していないが，さしあたり前者を要素からなり静的に表象できるもの，後者をそれら要素によって実現される動的な機能とみなせば良いように思われる．たとえばサイバネティクス的な思考機械は人間の脳の働きを異なる構造によって再現しようとしたものとみなすことができる．なお，「操

作」や「作用」とも訳されうる «opération» と同様，«acte» は訳出が難しい語であるが，構造と働きの両方を含むという点に鑑みて，ここでは試みに「活動」と訳すことにしたい．もちろんこの語は「行為」とも訳しうるが，その場合，人間の自由意志に基づく行動といった意味合いが入り込んでしまう．むしろエネルゲイア（現実態）に近いと考えられるが，その場合は状態の意味合いが強くやや具合が悪い．デカルトのコギトやメーヌ・ド・ビランの意志（*volo*）と同一視されるように（cf. ILFI, 530），一人称に従属するのではなく，それと一体となりこれを成り立たせているような活動がそこには認められるべきだろう．実際，デカルトのコギトとビランの意志は価値存在論（axiontologie）つまり存在論（ontologie）と価値論（axiologie）を主体に与えるとされる（cf. ILFI, 530）．

8）この同一視は，機械のみならず人間の疎外に通じ，教養の機能不全を示すとされる．「教養は技術的対象に対して，人間が素朴な異人嫌悪に流されるとき異邦人に対して振る舞うがごとく振る舞う．機械に対する新しいもの嫌いは，新しいものへの嫌悪という以上に，異質な実在に対する拒絶なのだ．ところでこの異質な存在［異邦人］はそれでも人間であり，そして完成された教養とは異邦人を人間として発見可能とするものである．同様に，機械は異質なものである．それは，そこでは人間らしさが閉じ込められ，誤認され，物質化され，隷属状態にあるが，しかしそれでも人間らしさを残している異質なものなのである．現代世界における疎外の最大の原因は機械についてのこうした誤認にある．［…］まさに私たちが示そうというのは［人間のような］ロボットなど存在しないということ，彫像は生物ではなく，たんなる空想や虚構による産物，つまり幻想術の産物でしかないということである．にもかかわらず，現在の教養にある機械観はこうしたロボットの神話的表象をかなり広範囲で組み入れている．教養ある人間は画布に描かれた対象や人物について，それが内面性を持ち，善意や悪意を持った本当に存在しているものであるかのように語ろうとはしないだろう．この同じ人間は，にもかかわらず，人間を脅かす機械について，あたかもこの対象が魂を持ち，独立し自律して存在すると認めているかのように語る．つまり機械という対象が人間に対する感情や意図を用いると認めているのだ」（MEOT, 9–11）．

9）働きに着目する方法論的態度は学位論文にも見られる．たとえば『技術的対象論』の第一部第一章の冒頭では次のように言われる．「実質的な類比はゼンマイばね［moteur à ressort］と蒸気機関［moteur à vapeur］とのあいだ以上に，この同じゼンマイばねと弓や弩とのあいだにある」（MEOT, 21）．技術的対象どうしの近さは，«moteur» という項＝単語（terme）によってではなく作動（fonctionnement）によって測られる．

10）Xavier Guchet, *Pour un humanisme technologique : Culture, technique et société dans la philosophie de Gilbert Simondon*, Paris, PUF, 2010. 特に第 2 章にあたる «La cybernétique et les sciences sociales» を参照．

11）Ronan Le Roux, *Une histoire de la cybernétique en France (1948–1975)*, Paris, Classiques Garnier, 2018. もちろんこの著作以外にフランスのサイバネティクス研究が存在しないわけではない．ル・ルーも参照するマチュー・トリクロの研究（Mathieu Triclot, *Le Moment cybernétique : La constitution de la notion d' information*, Seyssel, Champ Vallon, 2008）やピエール・カスー=ノゲスの研究（Pierre Cassou-Noguès, *Les Rêves cybernétiques de Norbert Wiener*, Paris, Seuil, 2014）などがそれである．ここで注目しておきたいのはトリクロもル・ルーもシモンドンに言及している点である．ただしその質には相違がある．本論で検討するように，シモンドンにおけるサイバネティクスとメタバシスとの繋がりを指摘するなど，ル・ルーが踏み込んだ言及をしているのに対して，トリクロのシモンドン理解はやや皮相なものにとどまっているように思われる．本稿でル・ルーの研究を参照する第一の理由はここにある．またトリクロおよびカスー=ノゲスの研究はサイバネティクスの思想的なポテンシャルを検討しようとするものであるのに対して，ル・ルーの研究は 1948 年から 1975 年のフランスの状況を対象とする点でより思想史的なものとなっている．サイバネティクス研究としては前二者が王道と言えるが，本稿の主題にとってル・ルーのアプローチはそれ以上の価値を持つ．これが第二の理由である（とはいえ，たとえばカスー=ノゲスによる，いわゆるポストヒューマン思想も射程に入れた議論が無価値でないことは言うまでもない）．

12）主論文の文献目録では第 6 回（1949），第 7 回（1950），第 8 回（1951）が，副論文ではさらに第 9 回（1952）が参照されている．いずれの議事録も翌年に Heinz von Foerster により出版された（ただし最初の 5 回を除く）．Cf. *Cybernetics : The Macy Conferences 1946–1953*, Claus Pias（ed.），Zurich-Berlin, Diaphanes, 2008, 2016.

13）*La Cybernétique : Théorie du signal et de l'information*, sous la présidence de Louis de Broglie, Paris, Éditions de la Revue d'Optique théorique et instrumentale, 1951.

14）文献目録には，科学技術関係のみの簡略版であるためか，この著作は見出されないが，しかしリュエイルが読まれなかったわけでは決してない．実際，リュイエルにはこれ以前に二本の論文（«Le problème de l'information et la cybernétique, *Journal de psychologie*, 1952, p. 385–418 ; «La cybernétique, mythe et réalité», *Les Temps modernes*, 1952, p. 577–600）があり，シモンドンは後者を草稿で参照している（cf. Ph, 48）．また 1956 年度のポワティエ大学講義のための草稿

「現代心理学の基礎」――そこではサイバネティクスの標準的だがそれなりに詳しい理解が示してされている――では 1954 年の著作が取り扱われている（cf. Gilbert Simondon, *Sur la psychologie*, Paris, PUF, 2015, p. 211）．なお，関連草稿が書かれた頃，シモンドンは高等師範学校を中心に哲学者と科学者とを結びつけるサイバネティクスの研究グループを立ち上げようとしていたが，実現しなかった（cf. Ph, 35n）．この目論見はおよそ十年後，シモンドンが組織者となった 1962 年のロワイヨモン会議で果たされることとなる．かつての師マルシアル・ゲルーを座長とするこの会議にはウィーナーその人も講演者として呼ばれ，フランス哲学界の重鎮（ジャン・イポリットやフェルナン・アルキエ，モーリス・ド・ガンディヤックら）と科学者の対話が実現された．Cf. *Le Concept d'information dans la science contemporaine*, Paris, Minuit, 1965 ; Gilbert Simondon, *Communication et Information* [2010], Paris, PUF, 2015, p. 159–176.

15） 『サイバネティックス――動物と機械における制御と通信』池原止戈夫，彌永昌吉，室賀三郎，戸田巌訳，岩波文庫，2011 年，27–28 頁．

16） サイバネティクスによってもたらされた重要な論点の一つに情報（information）があるが，ここで主題的に扱うことはできない．なお，生物学用語である個体発生（ontogénèse）に，存在（*on*）の発生（*genesis*）という意味が与えられている（cf. ILFI, 25［7 頁］）のと同様に，情報にも，形を与える（*informare*）という古い意味が含意されていると考えられる．この微妙な距離を考えるなら，サイバネティクス関連でより重要なのはフィードバックの概念だろう．これはシモンドン哲学の鍵概念の一つである内的共鳴（résonance interne）の着想源であり（cf. Ph, 46），アラグマティクス構想とも無関係ではない．用例 6 と 9（cf. ILFI, 61［77 頁］）を参照．

17） Cf. Guchet, *op. cit.*, p. 64–65.

18） Cf. Julien Loeb, «Introduction», in *La Cybernétique : Théorie du signal et de l'information*, *op. cit.*, p. 1.

19） Cf. *ibid.*, p. 1–2.

20） 『技術的対象論』では領域横断的な試みとして取り上げられるが，不十分さが言われるなど（cf. MEOT, 59），むしろ批判的な文脈での参照となる．あるいは，情報理論であり「したがって目的性を与えられた構造と力動性の理論でもある」（MEOT, 146）とされ，人間と技術の関係やそこから組織される社会構造に介入しうるものとしてしか扱われない．

21） これは量子論などの現代物理学に基づく反実体論の継承として指摘される．たとえばバルテレミーはその態度を，関係を脱実在化することなく脱実体化すること，と定式化している．Cf. Jean-Hugues Barthélémy, *Simondon ou l'encyclopédisme génétique*, Paris, PUF, 2008, chap. I.

22） Cf. Le Roux, *op. cit.*, p. 45–46.

23） Cf. Steven J. Livesey, *Metabasis : The Interrelationship of the Sciences in Antiquity and the Middle Ages*, 2 volumes, University Microfilms International, 1982. ル・ルーは同著者の論文（"William of Ockham, the Subalternate Sciences, and Aristotle's Theory of *metabasis*", *The British Journal for the History of Science*, vol. 18–2, 1985, p. 127–145）を参照している．

24） Cf. Le Roux, *op. cit.*, p. 561–563.

25） それが「アラグマティクス」でないのは，学位論文の用例にはメタバシスに関係するものが用例 11 以外に見られないからだ．用例 11 は，科学的発見について述べる箇所に含まれ，その点でまさに「アラグマティクス」草稿でのフレネル評価と地続きである．紙幅の都合上，議論の詳細は省かざるをえないが，アラグマティクス的認識論が対象とするトランスダクション的思考は帰納的プロセスと演繹的プロセス，つまり個別から一般に向かうそれと一般から個別に向かうそれからなるものとして特徴づけられる．

26） 学位論文とパリ大学講義における発明の議論についてはそれぞれ次の拙論を参照されたい．「シモンドンの個体化論における発明の範例性について」『アルケー』第 27 号，2019 年，39–50 頁；「イメージの実在性と半自立性」『美学』第 253 号，2018 年，1–12 頁．

＊本研究は JSPS 科研費 JP18J13573 の助成を受けたものです．

Les deux aspects de la conception simondonienne de l'«allagmatique» —— une forme de première réception française de la cybernétique ——

Tatsuro USAMI

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Résumé L'«allagmatique», néologisme forgé par Gilbert Simondon（probablement à partir du mot grec *ἄλλαγμα* qui signifie le changement, l'échange）pour désigner une théorie plus universelle que la cybernétique, est souvent regardée comme faisant partie de sa philosophie et soutenant ses thèses d'État. Une telle perspective ne serait juste toutefois que pour des textes préparatoires de ses thèses, car le mot d'allagmatique ne se trouve que vague et obscur dans la thèse principale et n'apparaît pas dans la complémentaire. On pourrait ainsi se demander si la conception de l'allagmatique s'est abandonnée au bout du compte. Le présent article vise à aborder cette question en examinant ses deux aspects, ontologique et méthodologique, et à montrer qu'ils se conservent dans les thèses sous forme de «réalisme de la relation» et de «paradigmatisme analogique».